

「前を向くということ」
～プロの格闘家を目指して～

専修大学商学部
会計学科 3年
A 28-0057C 三好涼太

目次

- 1 はじめに
- 2 格闘技との出会い
- 3 大学入学前の自分
- 4 専修大学入学後の歩み
- 5 第25回全日本アマチュア修斗選手権大会バンタム級3位入賞
- 6 プロ昇格と今後の目標

1 はじめに

私は、大学入学後、プロの格闘家になることを目指し、先日の2018年10月14日、第25回全日本アマチュア修斗選手権大会バンタム級に出場し、1回戦2回戦と勝利し、準決勝で判定の末に敗れたものの、全国3位となり、その結果、プロへの昇格が認められ、大学入学時の夢を果たしました。

私が、プロ格闘家になるまでについて、格闘技との出会い、大学入学までの自分、専修大学入学後の歩み、第25回全日本アマチュア修斗選手権大会、プロ昇格と今後の目標に分けて、報告します。

2 格闘技との出会い

私が初めてMMA(総合格闘技)を見た日のことは、今でも忘れません。2003年11月9日、「PRIDE GRANDPRIX 2003 決勝戦」が行われた日でした。

私はまだ当時6歳で鮮明な記憶とは言えませんが、言葉では表し難い感動と興奮、そして憧れを抱きました。その憧れは、今も、そしてこれからも私の中で揺るぎないものとして残り続けるでしょう。

その試合は、アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ VS ミルコ・クロコップの試合です。PRIDE 屈指のストライカー(打撃が得意な選手)と、グラップラー(組み技が得意な選手)の激突。試合結果は2ラウンド1分45秒、腕ひしぎ十字固めでブラジルの柔術王、ノゲイラが勝ちました。テレビ越しでも伝わってくる緊張感は凄まじいものでした。言うまでもなく私はその試合を観てから格闘技が好きになりました。

3 大学入学前の自分

この後、私は、大学入学まで、格闘家を意識するのですが、その道は、試行錯誤の連続でした。

まずは、小学生のころの話です。小学校に進学しても格闘技への想いは変わらず、入学したら空手か柔道を習うと密かに自分の中で決めていました。両親に勇気を出して武道をやってみたい意思を伝えると、父親が武道経験者だった事もあり、すぐ空手教室の体験に連れて行ってくれました。

私はその日のことを今でも鮮明に覚えています。殺伐とした雰囲気、鳴り響く罵声、泣き叫ぶ子供。とても同い年の子供達には見えませんでした。全て私が経験した事のないものでした。その日の体験は1時間でしたが、わたしには半日くらいに感じました。精神的に辛かったのです。「こんなところには殺されてしまう」「一刻も早くここを脱出しなければ」。幼いながらに自己防衛の本能が働き、周りを見渡して両親を探しましたが見当たりません。ほどなくして両親は練習している間、回転寿司で夕ご飯を食べに行ってしまった事実を空手の先生から聞き、脱出が不可能な事を理解すると、私は絶望しながら言われた通り正拳突きを練習をしました。言うまでもなく、私は格闘技が嫌いになりました。

恐怖の空手1日体験教室から約6年。私は中学生になりました。小学一年生の恐怖体験の影響もあり小学校の6年間は格闘技どころかスポーツから遠ざかり、テレビゲーム、カードゲーム、アニメ、と、インドア三昧でした。

次は、中学高校時代です。中学生になると必然的につきまとうのが「部活」の存在です。部活は、親が子供に「やらせる」習い事とは違い、自分でやりたい事を選んで始めます。入部届けを書くのも自分。指導者に休みの連絡を入れるのも自分。全て自分で選び、行動しなければなりません。中学生の部活は、人生で初めて限りなく自由に近い形で活動できる大切な人生のイベントだと思います。そんな大切なイベント、「部活動」。数ある部活動の中で私が、中学生生活を捧げるテーマに選んだのは、柔道でした。理由としては、サッカー、野球などの競技人口が多いスポーツより比較的初心者から始めやすい為です。しかし、それだけが理由なら文化系でいいように思えるのですが、当時思春期の私はスポーツというものに強い憧れを持っていました。小学校6年間はインドアに捧げてきた私は必然的にクラスでは日陰者になりがちでした。昨今では「陰キャラ」などと、呼ばれたり

していますが、私のクラス内のポジションはまさにそれでした。そのポジションを脱却すべくスポーツを始めたかったのです。なぜか小中学生時代というものは、ドッチボールが強かったり、かけっこが早いだけで爆発的に異性からの支持を得る事ができます。自分もそっち側になりたい。かくして私は「スポーツ・ドリーム」を掴むべく柔道部へ入部するのでした。

それから私は柔道にのめり込みました。中学一年生から高校三年生の夏までずっと部活動で柔道をしていました。異性から支持を得ることはありませんでしたが、汗を掻くことによって生まれる今まで経験した事のない爽快感を知って、スポーツが好きになりました。しかし、未経験で始めた割には頑張っていました。強豪校の選手には全く歯が立たない選手でした。記録も地区大会を2位で通過して、ギリギリ県大会に出て2回戦負け。といった具合で、とにかく「微妙」な選手でした。スポーツ推薦で高校に進学してからも、それは変わりませんでした。週6日。毎日7時からの朝練と3時間の練習。男子校で異性との交流を断ち切り、修学旅行にもいかず、ただひたすら毎日柔道をしました。しかし、最後の大会では県大会で2回戦負け。中学の頃と何も変わっていません。僕は努力する事に不信感を抱くようになりました。「努力しても意味ないんじゃないか」、「努力をやめて他のことをした方が楽しいのではないか」。そんなことを思うようになりました。

高校3年生の秋。部活も引退して、坊主頭がソフトモヒカンになった頃。家の近くにMMA(総合格闘技)の道場ができました。その時うっすらと、小さい頃に見たPRIDEの映像を思い出しました。今まで柔道に割いてきた時間が丸々暇になった私は手持ち無沙汰でした。そんな時に家から徒歩2分の所に道場ができたので、すぐに見学、体験に行きました。そして1ヶ月後、入会を決めました。

この時はまだ、この狭い道場から私の人生は徐々に変わっていくことを私は知りませんでした。

4 専修大学入学後の歩み

私は、専修大学商学部会計学科に、入学しました。大学生になった私は、全てが手探り状態でした。今、何がやりたいのか、将来、何になりたいのか。何もわかっていませんでした。とりあえずサークルに入らなければと、使命感に駆られて軽音サークルに入りました。サークルは少し怖いイメージがありました。無理やり入部させられるのではないかと不安でしたが、そんなことはありませんでした。健全なサークルが多く、先輩方もみんな優しく接してくれました。私が所属している軽音サークルのLPM同好会は格闘技をしながらバンドをしたいと伝えると、親身になってどうやって活動していくかを一緒に考えてくれました。入門ゼミなどの授業のおかげで友達作りが苦手な私でもたくさんの学部の友達ことができました。大学生活は専修大学のシステムにも助けられ順調な滑り出しでした。高校三年の秋から始めた格闘技は続けていて、週3回夜練に

通っていました。この時はまだ試合も出場しておらず、練習もそこまでキツくなく、どちらかというとフィットネス。健康維持的な要素が強かったと思います。

大学生は自由な時間がいきなり増えます。自分で授業を組み、好きな事を精一杯できる時期だと思います。世間では大学の4年間は人生の夏休みと言ったりしますが、まさにその通りだとも思いました。しかしその自由さゆえに、学業と私生活の両立がとても重要で、両立こそが大学生活における最大のテーマだと私は考えます。なので、よく考えて生活しなければと、強く思っていました。

とは言ったものの、その時の私は特にこれといった行動を起こすわけでもなく、無理せずバンドを組んで、無理せず格闘技を続けて、授業にはちゃんと出て、たまにサボって。そんな生活を送っていたら何もつかめないまま冬になりました。

しかしこの2016年の冬が大きなターニングポイントでした。この時、道場に入会してから1年が経ち、会長の勧めでグラップリング(打撃無しの格闘技)の試合に出ることになりました。初めてのケージ(金網)、初めてのマウスピース。緊張しましたが、柔道の経験を活かし1分ほどで相手の腕関節を極めて一本勝ち。その大会の「最短一本賞」と、プロファイター上田選手から送られる「上田賞」の2つの賞を獲得しました。SNSに賞状二枚を持った写真をアップすると今までにない数の「いいね」がつかまりました。私は完全に天狗になりました。味をしめた私はそこから今度はMMA(総合格闘技ルール)の試合に4回出場。これもまた柔道を活かして全て勝ちました。5戦5勝。サークルの仲間からも褒められ、会長や指導者の方からもたくさん褒められました。そうして私の天狗の鼻はどんどん伸びていきました。

しかし、伸びた鼻は意外に早く折れました。大学2年の夏休み、少し上のレベルの大会に出場しました。結果はKO負け。レベルが違いすぎました。打ち抜かれた右目は大きく腫れ、紫色に変色。脳へのダメージも大きくしばらく頭痛に悩まされました。よくよく考えてみれば、今までは趣味でやっている人相手に、柔道の時の貯金で勝っていたようなものなので今回の結果は当然です。

ここで私の頭をよぎったのは、柔道を引退するときと同じ「努力しても意味ないのではないか」、「努力をやめて他のことをした方が楽しいのではないか」という、努力に対する不信感でした。

しかし、その不信感を一気に振り払ってくれたのは、僕の師である会長でした。落ち込む僕の肩を痛いくらい強く掴み、「涼太、こっからだぞ」と、力強く言ってくれました。

なんでもないような言葉ですが、そのときの僕にはとても衝撃的な言葉でした。慰めでもなく、反省でもない。「こっからだぞ」。会長はこの一言で前を向く大切さを私に教えてくれました。

その日から私は前を向いて、会長を信じて、練習することができました。練習は週5回に増やしました。学業の時間を確保するために、夜勤のコンビニのアルバイトをやめて、

休日の昼や平日の夜働ける飲食店でアルバイトをしました。自分なりにノートを工夫したり、電車の移動の数十分でノートを見て予習する所にしました。わからない問題はすぐに誰かに聞く事にしました。サークル活動はバンドメンバーの協力もあり、早めに練習時間を設定して、夜の格闘技の練習に間に合うようにしてもらいました。

先ほども述べましたが、大学生活は「自由」。ゆえに「両立」が重要になります。自分なりに工夫して、学業、アルバイト、サークル、格闘技。全てに100%を注げるようによく考え、精一杯努力しました。昔の私ならこんな事は出来ませんでした。努力することに迷いがありました。しかし、会長の言葉のおかげで迷うのをやめて、しっかり前を見て実行することができました。この経験は僕の人生の大きな財産です。

5 第25回全日本アマチュア修斗選手権大会バンタム級3位入賞

初めて負けてから約1年。その間3回試合をして2勝1敗。2018年8月19日に満を持して関東予選に挑みました。この大会の入賞者は10月に行われるアマチュアMMAの最高峰、全日本アマチュア修斗選手権に出場する権利を得る事ができます。数ある地方予選のなかでも関東は最激戦区。厳しい戦いでしたが、今まで努力してきた結果が出て2位に食い込めました。惜しくも優勝は叶いませんでしたが、最激戦区の関東予選で2位を取れたのは自分の中で凄まじい進歩だったので、悔しかったものの私は達成感にあふれていました。1ヶ月後、私の全日本出場が決まりました。

しかしここでハプニングが起こります。試合2週間前の大事な時期にぎっくり腰で1週間寝たきりになってしまいました。欠場まで危ぶまれましたが、徹底した安静治療でなんとか試合5日前に回復。ギリギリ出場できました。安静にしている間は練習もできず、学校にも行けず不安でした。今まで積み重ねてきた努力が何1つ出せないで終わるのが怖かったです。しかし、この時も会長の言葉を、あの時のエピソードを思い出して気持ちを強く持ち乗り切れました。また、講義を欠席する連絡を専修大学の教授の方々にさせていただいたときも、快く欠席を許可していただき、提出物や今後どうすればいいかを丁寧に説明していただいたことで不安がやわらぎました。温かい労いの言葉までかけていただき、頑張ろうと前を向くことができました。

運命の全日本選手権。全日本選手権は日本のアマチュアMMAの最高峰の大会で、この試合で入賞すればプロ昇格。優勝すれば「アマ修斗王者」と、ある種のお墨付きをもらえます。

一回戦は静岡の選手からチョークスリーパーで一本勝ちでした。全日本レベルの選手に勝てたことで自信をつけることができました。

二回戦は「地下格闘技イベント・THE OUTSIDER」の現役チャンピオンが相手でした。この選手は他の団体でも知名度があるほど有名な選手でした。おそらく観客は誰も私が勝つことは予想していなかったでしょう。試合開始後、どんどん詰められる相手との距離。相

手選手の盛大な応援。怖い顔。前の私なら空気に、相手の実績に飲まれて押されていたと思います。しかし、前の私と違うのはこの1年間、前だけ向いて努力してきたという自負がありました。自信がありました。勇気を持って一步踏み込みました。結果は得意技のアームロックで一本勝ち。思わずケージの中で吠えました。久しぶりにあんなに大きい声出しました。次の三回戦で、今大会の優勝者に判定で敗れてしまいました。3位入賞することができました。

私はこの大会を通して何か大きく変わったわけでは無いと考えています。人が変わるのには1日、24時間では足りません。

しかし、この1日で、今までやってきたことの答えあわせができたような気がします。変わろうと足掻き続けた時間は、自分を信じて努力した時間は、全部間違っただけでなかったと確信できました。高校生の時に思った努力への不信感は無くなっていました。

とてもスッキリした気持ちで、私は表彰台の1番低い段に登りました。

6 プロ昇格と今後の目標

試合から5日後の夜、私のプロ昇格が発表されました。試合内容と対戦相手の強さが評価されたのだと思います。

6歳の頃、感動し、興奮し、憧れたあの舞台への一步を踏み出せました。

しかし、プロになったからといって何が変わるというわけではありません。プロの発表が出た瞬間に私の実力が上がるわけでもありません。私は私のままです。今まで通り、前を向いて、努力を重ねたいと思います。

そして私は来年から就職活動が始まります。しかし、この就職活動もできれば格闘技などと両立しながらやっていきたいと考えています。これからどんどん時間が経って、四年生になっても、大学を卒業しても、就職しても、本質は変わらないと思います。現に、プロになっても私は就職したいと強く考えています。スポーツ選手のセカンドキャリアの問題に加え、収入、怪我などの危惧などがありますが、1番大きい理由は他の活動を疎かにしたくないからです。今までやってきた通り全て頑張りたいです。

今私がやっている事より、これから両立しようとしていることは比べ物にならないくらい難しいでしょう。しかし、挑戦しようと思います。あの日、強い選手相手に一步踏み込めた私なら出来るような気がします。辺りを見渡して迷うよりも、まっすぐ前を向いて努力する。それが結果的に失敗だったとしても自分にとっては必ずプラスになります。

アマチュア MMA を通して得た沢山の経験やいろんな人との出会いは間違いなく、僕の人生の財産です。

あの日、会長が言ってくれた言葉。どんなに挫折したとしても、この言葉を思い出して頑張れるような気がします。

どんなにどん底でも、「こっから」だと思えます。

